九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Impact of income and eating speed on new-onset diabetes among men: a retrospective cohort study

石原, 礼子（宋, 礼子）

https://hdl.handle.net/2324/6758958

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：(c) Author(s) (or their employer(s) 2021. Re-use permitted under CC BY-NC.

（別紙様式２）

氏　　名	石原　礼子（宋　礼子）
論　文　名	Impact of income and eating speed on new-onset diabetes among men: a retrospective cohort study
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　小川　佳宏 副　査　　九州大学　　教授　　二宮　利治 副　査　　九州大学　　教授　　鴨打　正浩

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究は、中小企業の男性労働者における、所得と食事スピードが糖尿病発症に与える影響について評価することを目的としたものである。 研究のデザインは後ろ向きコホート研究であり、全国健康保険協会福岡支部から入手した2010～2015年度の医療レセプトデータと健康診断データを使用した。40～74歳の非糖尿病男性15,474名を対象として、アウトカムを5年間の追跡期間中の糖尿病発症の有無として、所得と食事スピードの違いを評価した。所得は月収25万円未満、25-35万円未満、35万円以上の3群に、食事スピードは「はやい」と「普通あるいはゆっくり」の2群に分類した。糖尿病発症のオッズ比を計算するために、糖尿病発症を従属変数、食事スピードおよび所得を共変量とする一般化線形回帰モデルを作成し、95%CI値を計算した。年齢、肥満、併存疾患についてデータを調整した後に解析した。同様の解析を年代別にも実施した。 全対象者のうち、5年間の追跡期間中に620人（4.0%）が糖尿病を発症した。一般化線形回帰モデルを用い、年齢、肥満、併存疾患を調整した後、早食いと低所得は共に糖尿病発症の独立した危険因子として認められた。年齢区分別では、肥満と併存症の有無で調整後、40代のみ早食いと低所得は糖尿病発症の有意なリスク因子として認められたが、50代、60歳以上ではいずれも認められなかった。本研究では、早食いは糖尿病発症に対して低所得の影響を受けず、早食いと低所得が糖尿病発症に影響するメカニズムが異なることが示唆された。所得格差に対する介入は困難であるが、所得などの背景要因に対して対策を講じることは、糖尿病のコントロールや医療費適正化に資する可能性がある。一方、食事スピードはコントロール可能な糖尿病のリスクファクターであることより、食事スピードを含めた食習慣に対する教育や指導は効果的な糖尿病予防であると考えられる。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。
よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。